

県議選 3 回連続 トップ 当選 を果たす！

人間の真価は逆境を乗り越えて生きることにある

大沢幸一

人生には3つの坂があると言う。「上り坂、下り坂、まさか」というサカである。この度の東日本大震災および福島第一原子力発電所の事故も然りである。地方議員として、防災・危機管理の在り様について、根本から見直す作業を積み上げていかななくてはならないと考えている。

我が家の事とて、まさか、最愛の妻が54歳にして、現代の医療では不治の病とされた若年性アルツハイマー病に罹患するなどとは想定外であった。2004年6月、セカンドオピニオンによって病名が確定されたのである。

2006年2月群馬県議会定例会の一般質問で「若年認知症対策について」県当局の見解を質したと同時に妻が若年認知症であることを公表した。その瞬間から新聞、ラジオ、テレビの取材申し入れが殺到した。「まさか」という思いが、私を駆り立てた。「私ごとであって私ごとでない。我が夫婦同然の苦悶の生活を強いられている家族が存在している筈だ。まず家族介護の実態をさらけ出しながら、介護という問題点や課題を社会に認識していただくことを起点する」そうした観点からメディアの取材に応じた。

2006年6月28日、当時、群馬県こころの健康センター所長であった宮永和夫氏（県職員であることから先生という呼称は使わない）のご指導のもと「若年認知症ぐんま家族会」を設立した。私が県議会議員であることから周囲に配慮して副会長に選出された。

2008年5月定例会では、全国で初めての「若年認知症対策に対する国の意見書」を全会一致で可決。更に、妻の介護と県議会議員の職務を遂行しながら、約1年半を要して闘病記を作成。同年12月2日、講談社より「妻が若年認知症になりました」(327ページ・1,500円税抜き)を発刊していただいた。

この初刊を機に県内外から認知症をテーマにした講演会やシンポジウムへの講師・シンポジストの要請が寄せられ、すでに心ある自治体、NPO法人、施設事業者、医療機関、宗教団体等、56団体からお招きいただき、遠くは四国松山市まで出向いてきた。

20011年2月、東京都内で、若年認知症サポートセンター（宮永和夫理事長）の主導により「全国若年認知症家族会・支援者の集い」が開催され、同会の顧問に就任した。本年2月には福岡市で第2回全国集會が開催され、選挙目前ではあったが出席した。この4年間、いや8年間の生活は、筆舌に尽くしが

たいものがあった。

本年は、統一地方選挙の年である。4月10日は「県議会議員選挙」が執行された。JP組織内候補者として3度目の挑戦であった。

20歳で無集特定配郵便局に採用され、自分の選挙を含めて40年前後、選挙運動に関わってきた。市議会、県議会、衆議院議員、参議院議員の各選挙の選対役員の中樞を担ってきた。その結論から言えることはこうだ！「選挙ほど恐ろしいものはない。選挙ほど人様に迷惑をかけるものはない。だからいかなる理由を問わず、出馬を決意した以上『絶対勝つ』という信念を内なる意識の中で高めなくてはならない」

1999年4月の市議会議員選挙に対して、現職県議から延べ5日間、徹夜で出馬要請があったが、固辞し続けてきた。しかし、軌を一にして地元有力者からの説得を受けて出馬を決意せざるを得なかった。結果は、4,116票の大量得票でトップ当選（定数26・立候補者28）を果たすことができた。このレコードは、平成の大合併前であり、桐生市議会議員選挙史上、誰も破ることが出来ないものである。

2003年4月、現職県議の勇退に基づいて、紆余曲折あったが、県議選に舞台を変えることとなった。結果は17,192票でトップ当選。（定数3・立候補者4）2期目の選挙も、票数は減らしたものの16,629票でトップ。本年4月の3期目は、15,417票で、これまたトップ当選で飾ることが出来た。この勝因はなんといっても地域および支援労組が一丸となって戦った成果であると肝に銘じている。

今回の県議選は、東日本大震災の被災者の痛みを痛みとして、現職議員の合意により、選挙運動用自動車を自粛することとした。したがって、自転車に乗り、ヘッドマイクで終日選挙運動を行うこととなった。所謂ウグイスがつくわけでもない。一人で声を張り上げていた。それでも声が枯れることはなかった。夜間は個人演説会である。

群馬県議会2月定例会は、3月10日に閉会となった。議会の帰路、妻が寝ている老健へ面会に行った。嚥下障害による胃瘻（延命装置）での栄養補給は昨年5月に施されている。この日を境に選挙終了時まで、まさしく断腸の思いで妻への面会は断念した。

4月1日告示、5時30分起床。身支度を整えて、午前9時、地元の新宿八幡宮で、いざ必勝祈願祭。その後、選対が決めたスケジュールに沿って全力を投入する。2日目、午前3時頃から愛犬（グレートデーン・10歳）の体調に異変が生じる。すべての日程を終了して午後9時30分頃、帰宅。愛犬の姿が見えない。懐中電灯で探す。犬小屋の近くで四肢を伸ばして既に冷たくなっていた。冷たい風が吹き、いつ雨が降るかもしれない空模様である。愛犬に使用

していた毛布をかけ、その上をビニールで覆った。不思議と涙が出なかった。

翌朝6時起床。選挙日程に支障を来さぬよう、庭の片隅に土葬する作業にとりかかった。幸いに若い運動員2人が手伝ってくれた。作業中も涙一滴出なかった。なぜかわからない。土葬を終了して、朝食抜きで事務所に向かった。予定より1時間遅れの運動となったが、懸命に挽回した。

選挙時も家庭でのサポート役はいなかった。毎朝6時起床、夜は不定期帰宅。温かい食事が用意されているわけではない。風呂が沸いているわけでもない。毎日の衣類の洗濯をしてくれる人もいない。身の回りすべてを自分でこなしながらの戦いであった。疲れている暇などないのである。事務所内で「根性も体力も声の大きさも誰にも負けない！」などと冗談半分、本気半分で周囲の人を笑わせながら9日間戦った。

「人間の真価は逆境を乗り越えて生きることにある」を実践した戦いでもあった。選挙後は事務所の移転と後片付けに追われた。議会は会派の結成で動き始めた。それこそ紆余曲折あったが、7名の議員によって「リベラル群馬」を結成した。3期目は幹事長の続投と同時に「議会運営委員」および「議会改革検討委員」の2ポストが増えた。

5月27日（金）11：05～12：10（65分間）まで会派のトップ切って、一般質問を行うこととなった。この度の「東日本大震災について」および「中通り大橋線から北関東自動車道、太田藪塚インター間のアクセス道路の敷設」を重点項目に設定して当局の見解を質すことにした。